

## 新渡戸稲造の対外発信

：英文著書『日本：その問題と発展の諸局面』の考察を中心として

上品 和馬

### はじめに

新渡戸稲造（1862～1933）は、明治・大正・昭和期に、教育、植民政策、宗教、農政学、国際関係などの分野において活躍した自由主義者・国際主義者として知られている。

彼は1862年に現在の岩手県盛岡市に生まれ、1877年に札幌農学校で農学を修め、この時期にキリスト教徒となった。1883年には上京して東京帝国大学に入学したが、翌1884年には退学して、「太平洋の橋になり度と思ひ」<sup>1</sup>、私費でアメリカに留学し、ジョンズ・ホプキンス大学で政治史、国際法、歴史・政治学、財政学などを学び、さらに、公費でドイツのボン大学、ベルリン大学、ハレ大学といった諸大学で、農政学、農業経済学、財政学、統計学、農業史などを学び、1891年に帰国した。帰国後は、札幌農学校教授、台湾総督府技師、京都帝国大学教授を経て、1906年から1913年にかけては、第一高等学校校長として学生に深い人格的影響を与えた。1914年には東京帝国大学教授となり植民政策講座を担当、1918年には東京女子大学初代学長となった。さらに、1919年から1926年にかけては国際連盟事務次長兼情報部長（以下、国際連盟事務次長と表記）をつとめ、ジュネーヴを拠点に国際的な活動を展開し、1927年の帰国後も、貴族院議員、東京女子大学名誉学長、太平洋問題調査会（The Institute of Pacific Relations：以下、IPRと表記）日本支部理事長、大阪毎日新聞・東京日日新聞編集顧問などをつとめた。つまり、彼は、農学者、教育者、技師、行政官、国際行政官、英文ジャーナリスト、社会教育家として活躍した類まれな人物であったといえる。

以上のように新渡戸の活動が多岐にわたっているのは、当時の日本が彼のような多才な人材を豊富に有してはいなかったことによるが、その一方で、新渡戸自身が、研究室や書斎に籠って理論を追求する「思想の場」<sup>2</sup>に留まるよりも、理想を実現するために「実際の行動の場」<sup>3</sup>において、「実行」<sup>4</sup>を重んじたことにもよる。新渡戸は、19世紀のイギリスの歴史家・思想家のトーマス・カーライル（Thomas Carlyle: 1795～1881）の影響を受けて、「实在（Real）と理想（Ideal）との二つは、左程区別のあるもので無い（中略）。其理想の中に实在なるものが含んで居り、又た实在と云ふ中に理想が含んで居る（中略）。理想なるものは、必ず自分が実際に当らなければ、真味が分らぬ。」<sup>5</sup>、「理論をいじりまわすよりも、実行を心掛けたい。百の理論よりも一の実行が尊い。」<sup>6</sup>と考え、自らが実行することによって理想を実現させようとした。そのため、彼はその理想を実現させる最善の方法を考え出そうとした。例えば、「父母に孝を尽す」<sup>7</sup>という理想（目的）を抱いたら、その理

想を実現するために、「暑い時には煽いでやる、寒い時には暖くしてやる」<sup>8</sup>というように具体的な方法を案出したのである。

このような彼の考え方は、分野も内容も異なる様々な活動に表れている。例えば、その具体例を目的（理想）と方法の視点から述べると、(1) 長唄の三味線を大衆に普及させるために、従来の音の高低を表す譜面ではなく、習得が容易な指の位置を数字で示す視覚的な譜面を考案したこと<sup>9</sup>、(2) 台湾における砂糖産業を実現させるために、自ら技師として台湾現地の農民の意識改革を進め、砂糖製造技術をジャワやキューバから導入し、サトウキビの改良品種をハワイから輸入して砂糖産業を改良し、プロジェクトを軌道に乗せたこと<sup>10</sup>、(3) 後藤新平（1857～1929）の活動を実現させるために、新渡戸の弟子の官吏・鶴見祐輔（1885～1973）に、アメリカ政府との鉄の買い付け交渉や、関東大震災後の都市設計のためのアメリカ人専門家の招聘といった仕事をさせて、後藤を背後から支援したこと<sup>11</sup>、以上のように理想を机上の議論として終わらせず、それを実現させるための具体的・独創的な方法を考え出し実現させた例は、枚挙に暇がない<sup>12</sup>。

ところで、新渡戸といえば巷間に名高いのが、英文著書『武士道：日本人の魂』（Bushido：The Soul of Japan）（以下、『武士道』と表記）である。1900年にアメリカで出版され、数年のうちにドイツ語、ポーランド語、フランス語、ノルウェー語、ハンガリー語、ロシア語、イタリア語に翻訳され、最終的には世界的ベストセラーとなった。『武士道』は、日本人が欧米人に劣らず道徳観・倫理観を有しており、日本が列国に劣らぬ一等国であることを世界に知らしめたという意味において、当時の日本の代表的な対外発信となったことは紛れもない事実である。『武士道』については、出版当時から現在に至るまで、内外で多くの批評や研究がなされてきたことは周知の通りである。

そこで、本稿においては、『武士道』の約30年後に出版された英文著書『日本：その問題と発展の諸局面』（Japan：Some Phases of her Problems and Development）<sup>13</sup>（以下、『日本』と表記）を取り上げ、対外発信の観点から考察する。『日本』は、出版の時期が満州事変の直後となったために、日本の平和希求を主題とする内容と、満州を巡る日本の軍事行動とが矛盾し、『武士道』のような世界的ベストセラーにはならなかったといわれている英文著書である。そのような受容度のせいもあって、『日本』についての研究は十分になされているとはいいたい。

本稿では、対外発信の観点から、①新渡戸が当時の日本の状況をどのように捉えていたのか、②『日本』にはどのような目的が設定されているのか、③『日本』はどのような方法（基本姿勢）で書かれているのか、④どのような内容を伝えているのか、⑤具体的にはどのような文章上の発信方法が用いられているのか、⑥『日本』と『武士道』とを比較した場合に、目的・方法・内容・特徴・受容度においてどのような異同が認められるのか、以上の諸点を明らかにしたい。つまり、対外発信としての『日本』に光を当てるのが、本稿のねらいである。

## 1. 『日本』を考察する理由

本稿において、『日本』を取り上げる理由について述べる。その理由は4つある。

第1の理由は、出版当時から現在に至るまで、『武士道』が称賛も批判も含め注目される機会は非常に多かったが、他方、『日本』についてはまだ十分な分析がなされておらず、さらに、パブリ

ック・ディプロマシー（Public Diplomacy）や異文化コミュニケーションの観点から『日本』を分析した先行研究は、管見の限り見当たらないからである<sup>14</sup>。つまり、対外発信としての『日本』に対する評価が不十分だと考えるからである。

第2の理由は、出版の企画当初から、対外発信としての目的と方法が明確に意識されている英文書籍は、『武士道』と『日本』のみであると考えられるからである。

新渡戸の対外発信を目的とした英文著書としては、(1)『武士道』（1900年1月、改訂版1905年6月）、(2)『日本国民：その国土、民衆、生活』（Japanese Nation: its Land, its People and its Life）（1912年6月）（以下、『日本国民』と表記）、(3)『日本人の特質と外来の影響』（Japanese Traits and Foreign Influences）（1927年1月）（以下、『日本人の特質と外来の影響』と表記）、(4)『日本』（1931年9月）、(5)『日本文化の講義』（Lecture on Japan: An Outline of the Development of the Japanese People and Their Culture）（1936年7月<sup>15</sup>）（以下、『日本文化の講義』と表記）の5冊がある。

なお、上記の5冊以外にも、新渡戸の英文著書としては、『随想録』（Thoughts and Essays）があるが、これは日露戦争前後（1903年～1908年頃）に、日本国内で英語を学ぶ学生を対象とした雑誌『英学新報』とその後身『英文新誌』に書かれた英文随筆を中心にまとめられたものであることから、対外発信を意図した著書とはいえない<sup>16</sup>。

そこで上記5冊を検討すると、まず、『日本文化の講義』は新渡戸の没後の出版であることから、編集の時点で新渡戸自身による加筆・訂正・再構成がなされておらず、その意味において、出版物として新渡戸自身の意図が十分に反映されているとはいえない。次に、『日本国民』と『日本人の特質と外来の影響』は、各時期の講演記録をまとめ、後日大幅に加筆・訂正したものであることから、書き下ろしではない。講演録音の書き起こし原稿に手を加えたものと、最初から書籍として執筆したものとの間には差異が存在すると考える。つまり、新渡戸が出版の企画当初から対外発信を意図して書き下した英文著書は、『武士道』と『日本』の2冊のみということになる。

以上から、口頭表現である講演とは異なる意味において、すなわち文章による対外発信として、『武士道』と『日本』は、企画当初から書き下ろしとして構想され、海外の一般大衆を対象として、何のために何をいかに文章で伝えて理解させるかという発信の目的と方法が、他の英文著書よりも一層明確に意識されていると考えられる。

第3の理由は、新渡戸は時々の情勢に合わせて対外発信の目的や方法を変えたが、その彼が、1920年代の日中協調が崩壊してから1931年9月の満州事変勃発の直前までの時期に、どのような目的を設定し、どのような方法で対外発信を実施したのかを明らかにするためである。新渡戸が『日本』執筆の依頼を受けたのは、1926年12月に国際連盟事務次長を辞任し、帰国する直前の1927年1月であった。『日本』が出版されたのは、1931年9月1日である。このことから、その執筆期間は、1927年1月から1931年夏にかけての約4年半であったと考えられる。この期間は、1920年代後半に日中関係が悪化していき、1931年9月に満州事変が勃発する直前までの期間に重なることから、『日本』は、日本の満州政策を国際社会においてどのように理解してもらうのかに取り組んだ英文著書、つまり対外発信と捉えることが可能であろう。

第4の理由は、『日本』は、30代の『武士道』とは異なる発信方法によって著されており、『武士道』よりも多様で複雑な方法が駆使されており、新渡戸50代の円熟味が加わっていると考えられる。

からである。その一方で、なぜ『日本』よりも『武士道』のほうが長年世界各国で読まれ続けてきたのかという点についても明らかにしたい。つまり、本稿においては、対外発信としての『日本』の優劣双方の面に触れる。

以上が、本稿において『日本』を取り上げる理由である。

## 2. 新渡戸の情勢認識と行動

『日本』執筆の目的や方法を分析するに際して、当時の日本が置かれていた状況と、それに対する新渡戸の情勢認識を踏まえておきたい。

新渡戸は、明治維新を経て、日清・日露戦争と第1次世界大戦の戦勝以降の日本が、①日本国内の人口過剰・周密<sup>17</sup>、②日本人移民に対する欧米諸国からの排斥<sup>18</sup>、③（移民や原材料入手のための）領土不拡張<sup>19</sup>、④日本国内における原材料の貧困<sup>20</sup>、⑤外国による日本製品に対する高関税<sup>21</sup>といった問題を抱えていると捉えていた。

そこで、彼はそれらの諸問題を克服するためには、日本と同様に狭い国土に人口が周密しているイギリスやベルギーの政策を手本として、日本は農業国として進む道を捨て、工業国として、日本が持つ技術力・資産力・組織力を活用して生産した製品をアジア各国やアメリカの市場で販売することによって活路を見出す必要があると考えた<sup>22</sup>。

当時の日本は、日露戦争以降に賃借していた満蒙の土地（以下、満州と表記）を活用することで活路を拓こうとした。この日本の満州政策に対して、新渡戸は、「文明の空気を輸入するにせよ、或は教育を普及するにせよ、殖産事業を起すにせよ、あらゆる平和の技術を発達するに付けても、満州を以て角力の始りの土俵といふのである、（中略）之を土俵に應用するの機が熟したのである」<sup>23</sup>と肯定的に捉え、①満州の領土主権の歴史的背景、②安定政府もなく国際法も通用しない中国の国家として機能していない状態、③日露戦争後の満州に関する条約によって日本がロシアから得た法的権益、④日本が満州に10億円余を投資・開発してきたという経済的事実、⑤日本にとって工業資源の供給地としての必要性、⑥ロシアの満州への領土的進出の防衛地域とするための安全保障上の必要性、⑦中国の共産主義思想の日本への流入の防止といった、歴史的な理由、法的理由、経済的理由、安全保障上の理由、思想上の理由から支持した<sup>24</sup>。

次に、新渡戸の情勢認識を踏まえた上で、彼がどのように考え、どのように行動したのかについて述べる。新渡戸は、明治維新以来、日本が国際社会において二等国として扱われている状況を打開したいと考えていた。日本がそのような扱いを受けているのは、「吾人の英米に及ばざるやなお遠し。」<sup>25</sup>という理由からであり、日本自身が変わっていく必要があるというのが、彼の基本認識である<sup>26</sup>。そこで、上に述べた当時の日本が抱える5つの苦境を克服するためには、その苦境やそれを克服するための日本の政策に対して、国際社会を牽引する欧米各国へ「こっちから出向いて行って諒解させねばならぬ」<sup>27</sup>と考えた。新渡戸は、外交は各国の政府が行うものであるが、その外交に影響を与えるのは各国の世論であるとする世界的な潮流を認識して、各国の政府要人だけでなく、世論を形成する各国民の理解を得る必要があると考えた<sup>28</sup>。さらに、そのような理解を得る活動を実施するアクターとしては、「政治家や軍隊ばかりの任務ではないと思ふ。国民銘々が其の積

りにならねばならぬ」<sup>29</sup>と考えた。つまり、一日本国民である新渡戸自身も担うべきであると捉えた。また、日本について理解してもらう対象としては、隆盛の途にある「独り米国に限らず、各国の了解と同情を得る必要」<sup>30</sup>があると考えた。そこで、彼は日本政府の立場に寄り添いつつそれを先導する形で、海外講演、国際会議出席、海外の新聞・雑誌への寄稿、英文著書出版、他国の要人との個人的交流、知識層とのプロジェクトの協働などの方法によって、欧米の対日世論形成に影響を与えるという活動を実施したのである。これらの活動は、現在のいわゆるパブリック・ディプロマシー（Public Diplomacy:以下、PDと表記。邦訳で「広報外交」）に相当する活動であるといえる。すなわち、PDとは、ある国が自国の政策を円滑に達成させるために、対外発信、人物・文化交流、国際放送、高官の親善訪問・公式声明、大型国際イベントの開催などの方法によって、他国の国民に対して自国への理解を深めさせ、他国の世論を自国に有利な方向へ導く活動のことである<sup>31</sup>。

新渡戸の実行力は、PDにおいても発揮された。彼は、日本の国際的な地位を向上させ、日本が一等国の仲間入りを果たし、彼らと対等にやり取りできるようになるためには、日本についてのどのような情報をどのような方法で海外の人々に伝え理解してもらえばいいのかを熟考し、自らがそのアクターとなって実行し成果を上げようとした。

新渡戸が実施したPDを大別すると、①対外発信、②交流・協働、③人格の活用、④国際貢献、⑤国際正義の確立といった分類が可能である<sup>32</sup>。このうちの①対外発信としては、欧米での講演活動、ラジオ演説、国際会議出席、海外の新聞・雑誌への寄稿、英文著書の出版などが挙げられる。つまり、彼の対外発信の1つが英文著書『武士道』であり、『日本』であった。

### 3. 対外発信としての『日本』の目的と方法

まず、『日本』が、どのような目的で書かれたのかについて述べる。

日本が1920年代を通して既得権益に手を触れさせない範囲で、中国本土に対する内政不干渉政策を展開し、それに応じて中国の反日運動が鎮静化したことによって、日中両国は、経済的な協調関係を形成することができた。しかし、この対中協調外交は、清朝崩壊後の中国の国内が政治的に混乱していたから可能であった。この前提が蒋介石による国内統一によって1928年に崩壊し、中国のナショナリズムの高揚が反日運動という形で激化し、中国の失地回復の動きが日本の既得権益すなわち満州の回収にまで及ぶようになった。このような時期に、新渡戸が満州政策に理解を求めた対外発信が『日本』であった。日本の満州政策をいかに国際社会において認めさせるかは、彼がその生涯において最も苦心し尽力したテーマの1つであった。つまり、『日本』執筆の目的は、上述の日本が抱える5つの苦境とその克服策としての満州政策に対して、国際社会からの理解を得ることであったといっても過言ではなからう。

次に、『日本』を執筆するにあたって新渡戸が取った方法について述べる。ここでは、彼の方法の5つの基本姿勢について述べ、具体的な発信方法については後述する。

(1) 新渡戸は、「対満政策が悪いとか云うよりも日本と云う国其物の性格、即ち国家国民其物に（欧米各国が）疑を懐いて居るのであるから、さう云うものに向つて、局部的なことばかり説明して居つてもそれで私は疑が晴れるとは思はなかつた。」<sup>33</sup>と考え、当時の日本の苦境やそれを克服するた

めの政策の正当性を欧米に理解してもらうためには、「満州問題或は上海問題と云ふ局限された問題のみを説く」<sup>34</sup>のではなく、「日本の歴史に遡り、或は広く日本の国情に行渡つて説明をな」<sup>35</sup>し、さらに、「日本人は何を為しつゝあるかといふよりは、日本人は如何なるものか」<sup>36</sup>を理解してもらい、ひいては、「(日本) 国民の性格に対する信用」<sup>37</sup>を得ることで、日本の苦境や満州政策についても理解を得ようという方法を取った<sup>38</sup>。つまり、日本の政策という局部に対する理解を求めるのではなく、日本という国家の全体像を理解してもらい、国民性に対する信用を得ることで、日本の政策についても理解を得ようという方法を取ったのである<sup>39</sup>。

(2) 新渡戸は、(1) に述べたように日本の全体像を伝えることを主としつつも、その一方で、「必ずしも懸案の問題に拘泥する必要はない。それと同時に、之を避ける必要は尚更無い。時と場合に依ては最も極限された些細な事項について説明する要もあらう。」<sup>40</sup>と考へて、『日本』の各章の要所所で当時の時事問題についても主張した。すなわち、『日本』には、日本の全体像に対して理解を得、ひいては日本人の国民性に対する信用を得ることによって、満州政策という時事的主張についても理解を得るという方法が取られている。つまり、『日本』は、<全体> と <局部> との二重構造で書かれているのである。

(3) 新渡戸は、「日本に必要な知識は日頃外国人にも与へて置かねばならぬ。」<sup>41</sup>と考へて、それを実行した。例えば、満州から遠く離れた列国に、満州について理解してもらうためには、その土地がそもそもどういう状況であったかや、日本がその權益を得た経緯などの基礎的情報を日頃から相手国民に与へて説明しておく必要があると考へて、それを講演や新聞・雑誌への寄稿などの方法で発信したのである。

(4) 発信する側は、理解してもらう相手に対して、「偏見、にくみ、そねみ、うらみの気分があつてはならない。フェアプレー、ジャスティス、国際心を備へてかゝらなければ、成功するものではない。」<sup>42</sup>と考へ、その姿勢に基づいて、場合によっては各国の視点から説明するなどの公正な立場を保つという方法を取った。

(5) 虚偽報道や捏造報道などの嘘を流布させると、結果的にその国家への信用を失うことになるので、「偽りの宣伝をさけ」<sup>43</sup>て、事実にもとづいた「真実を語る」<sup>44</sup> ことによって国際社会からの信頼を得ることが最善策であると考えた<sup>45</sup>。すなわち、「現に起こつた基礎的現実」<sup>46</sup>つまり「事実」<sup>47</sup>を重視し、しかしその事実としては、「外面上の出来事」<sup>48</sup>や「個々バラバラの事件」<sup>49</sup>ではなく、それら「一連の出来事」<sup>50</sup>を分析し、そこから導き出される「根底に横たわる原因」<sup>51</sup>、つまり「真理」<sup>52</sup>や「真実」<sup>53</sup>を明らかにするという方法を取った<sup>54</sup>。

以上が、『日本』執筆にあたって新渡戸が取った方法の5つの基本姿勢であつたと考へられる。

#### 4. 『日本』の発信内容：その二重構造

前項において、新渡戸が『日本』において日本の全体像を描くことを主とし、局部的な時事的主張を従として、その両面から描こうとしたことに触れた。本項では、その全体と局部とが、『日本』の各章において具体的にどのように描かれているのかをみていきたい。読者は『日本』を読むことで、歴史や地理などの諸相を通して描かれる日本の全体像を知ると同時に、読者自身が生きる時

代における日本の時事的問題や主張についても知ることであり、その双方に対する理解を求められる仕掛けになっている。その二重構造を明らかにする。

第1章のテーマは、「地理的特徴——とくにその社会的・経済的影響に関して」である。全体としては、日本の地理的位置とそれによって生起している状況、気候の特徴、動植物の様相と食糧供給の状況、鉱物資源、森林と水の供給、河川と平野、地震とその影響などについて俯瞰的に説明されている。

時事的主張としては、①日本国内の工業資源の不足による工業化の困難、②1923年の関東大震災による経済的・精神的被害、③日本による満州への資本投資は極東のみならず世界平和への貢献であること、④中国政府の安定維持のための日本の政策は、カリブ海域におけるアメリカのモンロー主義政策よりもはるかに正当性が高いこと、⑤移民送出国と移民受入国間の問題は、各国の法律や政治で解決できる問題ではなく、人類が国籍や国家主義を克服して解決すべき問題であること、などが挙げられる。このように全体の流れの中の要所要所で、時事的主張が主たるテーマから時間的・地理的に飛躍してあるいは近接して挟み込まれているのである。以下の章についても、順次みていく。

第2章のテーマは、「歴史的背景」である。全体としては、神代から幕末までの歴史的経緯が俯瞰的に説明されている。

時事的主張としては、扱われている時代が神代から幕末までであることから、出版当時の時事問題に直結する主張はないものの、当時の情勢につながる形で主張されている。例えば、①日本の歴史的リーダーの聖徳太子が愛国者・国際主義者であったこと（日本の国際主義の伝統性）、②日本は中国の法制度を受容する際に、独自に高度の改革を加えたこと（中国との差異化）、③日本の封建制度が、欧米各国と同様の発展経過を辿ったこと（日本と欧米の歴史的類似性）、④日本とヨーロッパの土地制度の類似性、⑤中国と朝鮮の連合軍による蒙古襲来に対する報復としての豊臣秀吉による朝鮮征伐の正当性、⑥日本への軍事的侵略の目的を有したスペイン宣教師による布教活動に対する批判などが挙げられる。

第3章のテーマは、「新日本の出現」である。全体としては、第2章に続く形で、明治維新から1924年のアメリカ排日移民法成立までの歴史が語られている。

本章のテーマが新渡戸の生きた時代に重なっていることから、時事的主張が多くなされている。時事的主張としては、①日本が明治維新以降、欧米との関係を重視しつつ、司法・教育・軍事・行政などの諸分野の制度や体制を整備してきたこと、②法治国家へと改革を遂げた日本の推進力の源泉が、日本人の道徳性にあること、③朝鮮半島の不安定な状態が日本の安全保障上の危惧であったこと、④三国干渉をめぐる欧米の日本への対応が日本にとって過酷なものであったこと、⑤三国干渉は日本に対する領土不拡張を意味したこと（領土不拡張の潮流）、⑥H・G・ウエルズ(H.G. Wells: 1866~1946)が日本の列国入りを認めたこと、⑨中露間の秘密条約に対する批判、⑦アメリカ排日移民法に対する批判、⑧日露戦争後の宣伝による黄禍論の拡大、⑨日本が国際連盟規約に人種的差別撤廃を提案したが受け入れられなかったこと、⑩人類の過半数が白禍の犠牲者であるという事実に対して西洋人が無自覚であること、⑪日本が三国干渉やアメリカ排日移民法などの数々の苦難を強いられたにも関わらず、各国との平和維持を目指していることが挙げられる。ここでは、日本が列国の一員として相応しいことを主張しつつ、同時に欧米を批判している点が特徴的である。

第4章のテーマは、「政府と政治」である。全体としては、日本の「国体」とは何か、日本の議会政治のあり方、立法・行政・司法に基づく国家機能、政党の成立と進展、天皇の陸海軍の統帥権、帝国憲法と日本の皇室典範の特徴、元老・枢密院・貴族院のあり方、選挙制度、日本における自由主義の現状について説明されている。

時事的主張としては、①宗教・芸術・数学・言語の分野で他国を模倣したフランスが、日本の海外文化の模倣を批判するのは的外れであり、どの国でも高度な文化の流入は自然なことであること、②武士が自らの利益を犠牲にして、明治維新という民主主義的な社会変容を成し遂げた事実、③明治維新の特徴は、「皇室の権威の安定」、「民衆の権利の拡大」、「外国思想の導入」の3つにあり、日本の尊皇主義は、欧米の志向する民主主義と矛盾していないことが挙げられる。ここでは、海外の日本批判に対する反論、日本の良さの強調、日本の正当性の主張がなされている。

第5章のテーマは、「教育上の制度と諸問題」である。全体としては、日本の初等・中等・高等教育、女子教育、大学・高等専門学校教育、大衆教育、宗教教育、外国語教育などについて説明されている。

時事的主張としては、①義務教育によって一般大衆が精神的・社会的に向上したこと、②教育勅語が国民の道徳精神を育んだこと、③女子教育の普及によって女性の解放がなされつつあること、④新聞や定期刊行物の普及度の高さが日本の義務教育の成果を示していること、⑤日本の義務教育が家庭の貧富や本人の知能レベルに関わらず平等に受けられること、⑥出版物や国内の図書館の多さが日本の一般大衆の知的レベルの高さを示していることが挙げられる。ここでは、日本の良さが強調されている。

第6章のテーマは、「労働、食糧、人口」である。全体としては、数値でみる日本の人口の歴史的变化、人口増加の理由、増加する人口の食糧問題、食糧自給の困難、人口増加による国内の失業問題、過剰労働力の問題が顕在化した理由、労働運動、労働組合の形成の経緯、日本の労働水準が国際的レベルにおいても高いことなどについて説明されている。

時事的主張としては、①日本国内の人口増加と人口周密度の高さをめぐる諸問題、②欧米諸国によって日本の経済活動が妨害を受けたこと（各国の日本製品に対する高関税）<sup>55</sup>、③海外への日本人移民の大量送付は誤解であり、移民では人口増加問題の解決策にはならないことが挙げられる。

第7章のテーマは、「日本人の思想生活」である。全体としては、西洋の識者による宗教の定義が示され、それに対する日本人の宗教観が述べられている。さらに、神道・仏教・儒教・武士道・キリスト教が日本人に与えた影響について、歴史的事実に基づいた説明がなされている。

時事的主張としては、①人間の本质が善であるとする神道が、日本人の意識下に道徳精神を形成したこと、②日本と中国は同じ漢字を用いているが、同じ概念を共有しているわけではないこと、③中国の倫理は形骸化していること、④中国と朝鮮で活動した欧米の宣教師が政治的影響を与えたのに対して、日本で活動した欧米の宣教師は教育・医療・福祉などの分野における実際的影響と思想的影響を与えたこと（中朝との差異化）、⑤道徳心や良き品行が育つ土壌には廉恥心が必要であり、廉恥心の涵養こそ武士の鍛錬の基本であったこと（キリスト教と武士道の道徳観の類似性）、⑥キリスト教の日本への流入は欧米よりも時間的には遅かったが、日本人にとっては、仏教や中国思想よりも知的・霊的な面において近しいものであったこと、⑦日本では、儒教・仏教・武士道があった土壌の上にキリスト教が流入したので、ヨーロッパに比較してより容易にキリスト教を理解し深

めることができたことが挙げられる。ここでは、中国・朝鮮やヨーロッパとの比較による日本の優位性や、武士の廉恥心とキリスト教の道德観の類似性が強調されており、全体としては日本の良さが述べられている。

以上が、『日本』の各章の主な内容と時事的主張である。このように各章のテーマに沿った主となる流れがあり、その流れの要所要所でテーマと関連する形で、あるいは飛躍する形で、時事的主張がなされている。つまり、全体と局部との二重構造で描かれているのである。

第1章から第7章までにおいて、当時の日本の5つの時事問題、すなわち、①日本国内の人口過剰・周密、②日本人移民に対する欧米諸国からの排斥、③（移民や原材料入手のための）領土不拡張、④日本国内における原材料の貧困、⑤外国による日本製品に対する高関税のすべてに触れられていることが理解できよう。新渡戸は、『日本』において、日本の全体像を各テーマに分割して描き出しながら、それと同時に局部的な時事問題についても要所要所で確実に訴えかけた。新渡戸は、当初、『日本』執筆にあたって、国防、外交関係、海外領土の各テーマについても一章ずつ当てる予定で、「もっと大冊になるはずだった」<sup>56</sup>が、時間的な都合で叶わなかったと述べている。しかし、それらのテーマは完全に捨てられたわけではなく、可能な限り述べられているのである。

## 5. 『日本』の文章上の発信方法：その多様性

『日本』の方法の基本姿勢については、上述した。ここでは、文章上の具体的な発信方法について述べる。つまり、発信の文章上の技術である。新渡戸は、「宣伝をする以上は向ふの頭に入るやうにやるのだから、先方の分かる言葉を用ひるのが本式である。」<sup>57</sup>と述べている。彼がいう「先方の分かる言葉を用ひる」とは、単に＜理解しやすい語彙を用いる＞という意味だけではなく、それも含めて、＜欧米人が理解できる表現方法、つまり発信方法で伝える＞という意味であろう。

『日本』において具体的にどのような発信方法が用いられているのかを分析したところ、(1) 事実、(2) 統計、(3) 証言、(4) 類例、(5) 比較、(6) 貢献、(7) 主張、(8) 批判、(9) 感情、(10) 予測、(11) 共感、(12) 多面的説明、(13) 単純化、(14) 受容側の用語や表現、(15) 質疑応答の15項目の方法を見出すことが可能であった。以下に、それらの方法について述べる。

### (1) 事実

『日本』では、日本について理解してもらうために、実際に起こったこと、そのような事態に至った経緯、その事柄の現状などの＜事実＞を具体的に提示するという方法が用いられている。次の例は、明治憲法のシステムがどのようなになっているのか、その現状、その特異性、その問題点について説明している一文である<sup>58</sup>。

第十一条は、天皇は陸海軍を統帥すると規定している。天皇がこの命令を行使するのは、陸海軍大臣、を通してではなくて、陸軍参謀総長と海軍軍司令部長を通してである。この後者の職務は、内閣から独立しているから、それは直接天皇にだけ責任があり、それゆえ閣議の権限の外にある。ところで、陸海軍大臣、は公職規程によると、現役の陸海軍将官から任命しなければならない。そこで、これらの将軍が首相の頭ごしに行動するという、時代錯誤の奇

妙な習慣が起こった。(中略)わが国の政治、また時には外交において、軍事的要素が不当な優位をえる原因としばしばなったのは、この軍人の変則的特権である。(中略)ロンドン軍縮の直後、陸海軍当局の内閣に対する異常な権限の法律的側面が、最も真剣に、議会でも新聞でも論議された。しかしその問題は決して解決されていない。

この例では、事実を説明することで、新渡戸が懸念している日本の憲法上の問題点を指摘している。このように事実を提示することで読み手の理解を促す方法は、『日本』において非常に多用されている。他にも、例えば日本が欧米に学んだ事実(ルソーの思想やアメリカ憲法の研究などの導入)を述べて謝意を伝えることで好感を得ようとしている場合<sup>59</sup>、それとは反対に、欧米が日本に学んだ事実(アメリカによる日本ボーイスカウトのシステムの研究)を提示することで日本の優位性を伝えようとしている場合<sup>60</sup>、さらに、日本のマイナス面(対華21カ条要求)もプラス面(日本の武士道の独創性)も包み隠さずに、それらの事実を提示することで信用を獲得しようとしている場合<sup>61</sup>など、枚挙に暇がない。

## (2) 統計

上述の事実に基づいた説明をさらに客観的に突き詰めた方法が、数値やデータの形で事実を提示するというやり方である。次に示す例では、日本の食糧自給の困難さを示すために、数値を挙げながら具体的に説明している<sup>62</sup>。

増加する人口をどうして養うかが、人口問題のアルファでありオメガである。米を主食とするから、その需要関係がこの問題の決定要因となる。

問題点の例となる典型的な年として、平年(たとえば一九二八年)をとってみよう。

一九二七年からの持越	五、七二八、〇〇〇石
一九二八年の収穫	六二、一〇〇、〇〇〇石
朝鮮からの輸入	六、〇〇〇、〇〇〇石
台湾からの輸入	三、〇〇〇、〇〇〇石
他の国々からの輸入	二、〇〇〇、〇〇〇石
計	七八、八二八、〇〇〇石

この合計から五百万石を引かねばならない。それは、経験によればおそらく次年のために貯蓄される量であるから。すると残りは七千4百万石で、これが一年間の食糧(米)として利用できる。

さて、これに対して、国民のこの穀物に対する需要はどうか。

一九二八年の消費	六九、〇〇〇、〇〇〇石
一九二八年の輸出	八〇〇、〇〇〇石
計	六九、八〇〇、〇〇〇石

この計算では、供給が需要を約四百万石上まわることとなる。しかしこの量は海外からの輸入量の半分よりずっと少ないことを考慮に入れると、日本はとうてい食糧の自給はできていないことは明らかである。

このように数値を提示しながら論を展開することで、説得力のある説明となっている。

以上の(1)事実と(2)統計による方法が、『日本』においては最も多用されている。つまり、事実の提示によって客観的に読み手を納得させる方法が非常に多く駆使されているといえる。

なお、この方法は、新渡戸が日本支部長をつとめた非政府国際組織であるIPRの活動、すなわちIPRの国際会議において、各国が持ち寄った事実を交換することによって、相互理解の促進を目指した活動に通じるものであった。

### (3) 証言

日本について説明する場合に、西洋の哲学者や法学者などの識者の言辭、つまり<証言>を引用することで、客観性を高める方法である。特に日本を評価する場合に、日本人である新渡戸自身が日本の美点を述べると自画自賛になるので、そのような場合に欧米の識者の言辭を引用し、欧米人の視点からの評価を提示することで、より客観性を担保しようとしている。次の例は、日本が一等国として承認されたことを、他国の権威ある国際法学者のジョージ・G・ウィルソン(George G. Wilson: 1863~1951)の言辭を証言として引用している一文である<sup>63</sup>。

「国際法、の有名な権威者がこの問題についてのべている。「戦争の結果としてではなく、(中略)日本帝国は国際場裡へ加入をゆるされたのである。すなわち、経度においても、言語においても、習慣においても、西洋諸国から遠く隔った国家が、価値ある文明の発展によって、諸国民の家族の中にあつて、全く対等な一員として、その地位を獲得したという確認を得たのである。」

このように日本が一等国としての資格があることを主張する際に、欧米の識者の言辭を引用することで、読み手を納得させようとしている。他にも、欧米の識者だけでなく、日本人・中国人の識者や専門家の言辭を引用して、読み手の理解を深めようとしている場合もある。

### (4) 類似

日本のある事柄について、西洋の類例を提示して日本と西洋の類似性を強調することで、欧米人に日本に対する親近感を抱かせようとする方法である。次の例は、日本とヨーロッパの中世の封建制度の類似を示すことによって、国家的な成熟度の類似を主張している一文である<sup>64</sup>。

封建制フューダリズムについては———ホウケンホウケンをそう訳すのだが(中略)日本語のホウケンとヨーロッパの封建制とは、その発展過程もその一般性格も酷似しているから、人類の社会進化における同一の政治経済段階にあったと見て、同一視してよからう。

これ以外にも、類似の方法の例としては、「冥界王プルートーよりは火神ヴァルカンの贈物を余計に受けているので、帝国全体は、アジア大陸東岸を離れ、太平洋から突き出た長く連なる峰々からなる。(中略)ヴァルカンはまた、日本中をいたるところすっかり、数えきれぬほどの美しい風景地で覆ってきた。」<sup>65</sup>が挙げられる。この場合、日本の地理を説明するにあたって、ローマ神話やギリシャ神話の神々であるプルートー(Pluto)やヴァルカン(Vulcan)を登場させることで、日本とヨーロッパの類似性を表出させている。この場合、時間的・地理的に異なる要素を持ち込んで

いることから、時間的・地理的な飛躍が生じており、アナクロニズム (anachronism) と地理的誤謬 (geographical blunder) の方法が駆使されているといえる。むろん、読者である欧米人に日本に対する親近感を抱かせるためである。

### (5) 比較

日本のある事柄について、他国の同じ事柄と比較し、双方の相違を示すことで、日本の特徴・独自性・問題点を理解させる方法である。次の例は、人口密度について、日本・イギリス・ベルギーを数値で比較することで、人口密度の高さによって生じている日本国民の生活の深刻さを理解させようとしている一文である<sup>66</sup>。

(日本は) 世界で最も人口稠密な国の一つである。これを凌ぐ国としては、ベルギー、オランダ、イギリスなど少数の高度に工業化した国々があるだけである。密度は当然、気候や生産性に依じて、国のいろいろな地方で違っている。そこで国土一平方キロメートル当たりでなくて、耕地一平方キロメートル当たりというふうに人口密度を計算しなおすと、日本の密度は一平方キロメートル当たり九百六十一人となって、これは、ベルギーの二倍、イギリスの四倍以上である。もし人間がパンだけで生きる動物であれば、日本の人口問題はイギリスのより四倍深刻ということであろう。

この文は、(5) 比較と (2) 統計の2つの方法を複合的に用いている例である。

### (6) 貢献

日本が世界に貢献した事実を提示することで、日本に対する好感を得る方法である。次の例は、第1次世界大戦時に日本海軍が連合国側に対して貢献した多くの行動を列挙しながら説明している一文である<sup>67</sup>。

M・D・ケネディ大尉は、その近著において、日本海軍が連合国の大義に対して行った貢献を、次のように数えあげている。「日本海軍が青島のドイツ海軍基地と要塞を占領したこと。日本海軍がオーストラリアとニュージーランドの軍隊および戦時物資を護援したこと。日本海軍が商船急襲隊に対し貿易航路を保護し、オーストラリアとニュージーランドを掩護した際の援助。日本海軍がイギリス戦艦を他の作戦場裡での活動に解放した援助。日本海軍がドイツの太平洋における島嶼領土を掃討し、ドイツの無線基地を破壊した援助。フォン・シュペーの艦隊とエムデン号の究極的敗北における間接的援助。その他多くの点。」(中略) 大戦における日本の貢献——すなわち連合国政府への——をさらによく評価するため、尋ねてみてもよからう。もし日本が超然としていたら、またもし日本が「協商国」に加担していたとしたら、もし日本がイギリスと協力できなかったとしたら、もし日本がオーストラリア軍輸送の航路を護衛しなかったとしたら、その結果はどうなただろうか。

この例は、日本の行動を説明する際に、自画自賛にならないように西洋の著名人の言辭を引用することによって、日本の多くの貢献を理解させようとしている。つまり、(3) 証言と (6) 貢献の2つの方法を複合的に用いているといえる。

## (7) 主張

新渡戸自身の主張・思想・分析を直裁に述べる方法である。次の例は、新渡戸の根幹的思想の1つともいえる世界土地共有の思想について、理解を求めている一文である<sup>68</sup>。

北太平洋地域において、約5億のアジア人と約600万のアメリカ人とが一層密接に接触するようになっている。双方に自己保存と自己実現の本能が働いているので、一方に大洋を行き来させ、一方は締め出している問題を解決して、この両集団の生活水準の開きを解決しなければ、人類に破局が訪れるほどの世界的問題である。この問題は、移民送出国でも受入れ国でも、どのような法律を作っても政治的策略を弄してみても解決しない。この問題は国籍という観念を超えているからである。人間が国家的利己主義を克服し、各国民の究極の善が人類の他の人々との調和協調にあることに理解を示さなければ、解決しない。この問題を解決するためには、科学的方法によってこの全地域の資源を合理的に開発し、その成果をその領域に住む全住民に公平に分配する方法を考案する必要がある。この目標達成のためには、太平洋地域の諸国家は、「太平洋の支配」や「太平洋の覇権」といったスローガンに基づいた精神を排除すべきである。太平洋地域について、単にナショナリズムによって語る人々は、どの規模も重要性も理解していない人々である。敵対心による大洋の分割ではなく、友好的にその資源を分け合うことによって、太平洋はその世界大の目的の促進に寄与せしめられる。

これは、単にアメリカ排日移民法（1924年施行）を批判しているだけでなく、日本の人口問題を人類全体の問題として捉えるべきであるとして、その解決策を提案している。新渡戸の思想を明確に主張している一例であり、彼の方法の1つである。

## (8) 批判

他国に対する批判を率直に述べる方法である。次の例は、西洋諸国を痛烈に批判している一文である<sup>69</sup>。

西洋列国が日本の自己改善をしぶしぶながらも認めたのは、日本がそれを証示するのに平和的手段をとったことによることも見てとれよう。西洋は文化の進歩を———少なくとも東洋国民の場合には———それが軍事力や暴力という形をとるまではみとめることができないようである。中国との戦争、またつづいてはロシアとの戦争がはじめて、西洋に、われわれがいくらか進歩したことを確信させたのである。

この文では、列国入りを後れて果たした後進国として媚びることなく、多少ユーモラスに列国を批判している。

## (9) 感情

新渡戸は、論理的・理性的な説明を重視しながらも、日本の国民感情や心理的な反応を率直に伝えることも重要であると考え、感情を伝える方法も用いた。次の例は、三国干渉に対する日本国民の感情を説明している一文である<sup>70</sup>。

日本は、ドイツがフランス、ロシアとともに、日清戦争後に演じた不信行為を決して忘れなかったが、独裁的なカイゼル、能率的な行政、警察行政、『祖国』の学術と産業の進歩に対する讃嘆（中略）が皆いっしょになって、ドイツの非友好的行為に日本が抱いた恨みを鈍らせていた。そこで大戦の勃発時には、ドイツに対し少なからぬ同情がみられ、それも包み隠しもされなかった。

以上は、歴史を語る際に事件の背景や経緯だけを述べるのではなく、その時の日本国民の感情についても直裁に伝えている例であり、欧米に日本人の生の感情を理解させようとする方法である。

#### (10) 予測

ある事柄について、将来的展望を述べる方法である。次の例は、日本では将来的に仏教が生き残り、キリスト教と競争する形で日本人の宗教生活の発展に寄与すると予測している一文である<sup>71</sup>。

仏教の働き手とキリスト教の働き手の間の健全な競合こそ、この国の宗教生活の発展における次の段階であると思われる。

これは、キリスト教を思想の根幹としている西洋人の親近感に訴えかけて好感を得ようとしている例である。

#### (11) 共感

英米と日本の共通の敵について述べることで、英米読者の親近感を得ようとする方法である。次の例は、日本・イギリス・アメリカにとって共通の脅威国であるロシアの戦略に対して強い表現で批判することで共感を得ようとしている一文である<sup>72</sup>。

アメリカ人の好きな言い方でいうと、ロシアの『自明の運命』は、朝鮮を合体し、ついで日本を東の海に突き刺すことであることは確かであった。

以上に挙げた11の方法は、『日本』において度々用いられている、内容から分類した発信方法である。以下は、内容ではなく、コミュニケーションの回り方から分類した発信方法である。

#### (12) 多面的説明

ある事柄を複数のアクターの視点から多角的に描くことによって、真実を立体的に浮かび上がらせようとする方法である。次の例は、日英通商条約をめぐる歴史的経緯を日本、イギリス、アメリカの複数の視点から描いている一文である<sup>73</sup>。

日英通商条約が改定されたとき、その交渉は最も誠意ある態度では行われなかった。(日英の) 両国とも、いささか冷たい態度を覚えた。そしてこの感情がオーストラリアによって強化された。グレイ卿のような遠目のきく政治家は、一再ならず、同盟の継続は両国にとって切実な要求だと表明したが、大戦がアメリカを、経済的にも政治的にも卓越した地位に押し上げたので、大英帝国も、アメリカに少しでも疑いの種を与えることはできなかった。——そしてアメリカは、というよりその低俗新聞は、日英同盟を、まるでアメリカを敵視したものであるか

のように、根拠のない疑いの眼で見てきていた。

この文は、描写していく過程で、アクターの視点を次々と変えて、物事をより立体的に描き出している。こうすることで、文章にリアリティを生み、説得力が増していると考えられる。

### (13) 単純化

欧米人が受容しやすいように物事を単純化して説明することによって、理解させる方法である。次の例は、日本の特殊な言葉である「国体」を、可能な限り単純化して表現している一文である<sup>74</sup>。

してみるとコクタイは、もっとも単純な言葉に戻してみると、この国を従え、わが国の歴史の始めからそれを統治してきた家系、の長による、最高の社会的威信と政治権力の保持を意味する。(中略) こうして天皇は、国民の代表であり、国民統治の象徴である。こうして人々を統治と服従において統一している絆の真の性質は、第一には、神話的血縁関係であり、第二には道徳的紐帯であり、第三には法的義務である。

### (14) 受容者の用語や慣用表現

英語の一般的な用語や慣用表現を用いたり、日本語の固有名詞を使わずに説明したりすることで、受容側にとってより理解しやすくする方法である。すなわち、対象国の国民の感性や受信能力に合わせて発信する方法である。次の一文では、「明治維新」という言葉を使わずに、欧米人が理解しやすいように「明治初年の平和革命」と噛み砕いて表現している<sup>75</sup>。

明治初年の日本の平和革命の話は、もう何度も語られているから、私がここでくりかえすには及ばない。

また、『日本』においては、日本の物の単位、例えば、「日本の貨幣、重量、尺度の名称を、英語のそれ相当のものに換算し」<sup>76</sup>、英語話者が受容しやすいように改めている。

### (15) 質疑応答

西洋人からの質問を想定し、それに新渡戸が答えるという質疑応答の形式で説明する方法である。次の例は、1637年以降明治維新に至るまで、日本は切支丹禁制と鎖国令を布き、民衆に対してキリスト教を恐れ憎むように組織的に教えたが、そのことについて欧米人の疑問に答える形で説明している一文である<sup>77</sup>。

重大な問題は、日本人は外来の信仰に非寛容であるか、日本人は頑迷偏屈か、日本人はきわめて自己中心で、自分の声以外誰の声にもその耳を貸さないのか、である。歴史がそれに答える。(中略) (儒教と仏教は受け入れられ) 何世紀もの間、日本は正当と異端の住家であった。そこでは狼と子羊とがともに住んでいた。(中略) だから、キリスト教に示された非寛容は、異常心理の錯乱であって、民衆の注意を、国家、にとってもっと重要ななにかからそらす政策として目論まれたのだった。

以上に、『日本』において用いられている15項目の方法を明らかにした。なお、これらの発信方法が場合によっては複合的に用いられていることは、すでに述べた通りである。

## 6. 『武士道』と『日本』の比較

以上に、対外発信の観点から、『日本』の目的・内容・方法について検討した。次に、それらの項目について、『武士道』と『日本』とを俯瞰的に比較した場合に、どのような相違が見出されるのか、あるいは同じなのかを検討する。さらに両著書の発信にはどのような特徴があるのか、両著書がどの程度受容されたのかを比較することによって、『日本』の優劣双方の面を明らかにしたい。

### (1) 目的

新渡戸が『武士道』を書いた目的は、日清・日露の戦争に勝利した日本が好戦的で野蛮な国ではなく、欧米人が「日本民族の道德思想をもって、あえて奇怪なるものなりとせじ。(中略)我邦を見て、解すべくまた精神を同じくするものなり」<sup>78</sup>と捉えるような、西洋に劣らない、普遍的な道德観を有した文明国であり、一等国としてふさわしい国であることを理解させることにあった。

他方、『日本』は、第1次世界大戦後に植民地経営の拡大化に向かう日本に対して疑念を抱く欧米人から、日本の「国民の性格に対する信用」<sup>79</sup>を獲得し、それによって日本が抱える、人口増加をはじめとする時事的問題を克服するための満州政策の正当性についても理解を得ようというねらいがあった。

### (2) 内容

『武士道』は、日本の武士道における、義、勇気、仁、礼、信、誠、名誉、忠義などの抽象的な観念を具体的に説明することで、日本人が西洋人と同様に普遍性のある道德観を有していることを主に主張している。

それに対して、『日本』は、地理、歴史、政治、教育、労働、食糧、人口、思想といった日本の諸相について、具体的な事実や統計を用いて総括的に説明することで、日本が欧米に劣らぬ優秀な国家であり、信頼するに足る国民であることを主張している。

内容の焦点という面から両著書を検討すると、『武士道』の焦点は日本人の道德性に概ね絞り込まれている。他方、『日本』の焦点は広く日本の諸相全般に当てられており、それゆえ全体の印象が不鮮明になっているといえる。

### (3) 方法

『日本』においては、欧米に伝えるための15項目の方法が駆使されていることは、前述の通りである。ここでは、それを踏まえた上で、両著書の地の文が基本的にどのような構成で書かれているのかを検討したい。

まず、『武士道』の地の文は、新渡戸自身の<主張>と、東西識者の言辞つまり<証言>とが交互に配置されている。すなわち、「主張、証言、主張、証言、主張、証言……」という構成になっている。これは基本的な構成であって、それとは異なる構成が取られている場合もある。

他方、『日本』の地の文は、テーマに関して<事実>を述べる文と、その論拠となる<統計>が交互に配置されている。すなわち、「事実、統計、事実、統計、事実……」という構成になっており、

そこに東西識者の〈証言〉が要所要所で引用される。これが基本的な構成である。このような『日本』の方法は、〈事実〉の断片を伝えようとしているのではなく、個々の〈事実〉から導き出される〈真実〉を伝えようとしているのである。つまり、「現在日本で起こりつつある様々の変化の底にある思想や動機を理解し」<sup>80</sup> てもらおうとしているのである。

次に、両著書において東西識者の言辞がどの程度引用されているのか、つまり〈証言〉の数を比較したい。日本語訳でみた場合に、『武士道』の総文字量は約 109,000 字であり、引用は 206 例である。他方、『日本』の総文字量は約 265,000 字であり、引用は 152 例である。『日本』の文字量は、『武士道』の約 2.4 倍であることから、この文字量の比率を双方で揃えたと、『武士道』の引用数は、『日本』の約 3.3 倍であることになる。『武士道』は、『日本』に比べて、東西識者の〈証言〉の引用が圧倒的に多用されている。『武士道』は、新渡戸自身の主張（思想）を支えるために、東西識者の言辞が非常に多く援用されているといえる。

それでは、両著書において引用はどのような使い方がなされているのか。『武士道』では、日本と西洋の双方が類似していることを強調するために引用されている場合が多い。特に日本の普遍性について説明する場合に、引用することで欧米との類似性が強調されている。つまり、日本のある慣習や文化が特殊なものではなく、西洋にもそれらに類似したものがあつ、西洋にも通じる普遍的なものであることを理解させようとしている。この類例の引用は、『武士道』のほうが『日本』よりも多用されている。したがつて、日本と西洋との普遍性を強調することによつて西洋に近づこうとする姿勢は、『武士道』のほうが強いといえる。例えば、『武士道』は、欧米人が理解しがたく野蛮なものとな捉える切腹などの日本人のしきたりや慣習に普遍的な思想があることを説明したり、日本が欧米と同様に普遍性のある道德観を有する国家であることを示したりすることで、理解や共感を得ようとしている点にその姿勢がみられる。

それに対して、『日本』では、普遍性を述べるために類例が引用されている場合もあれば、反対に日本の特殊性を述べるために引用されている場合もある。引用のされ方が必ずしも類似を示しているわけではないことから、日本という国家をより客観的に描こうとしているといえる。

以上から、『武士道』は、日本の特殊と見えるものの中に普遍性があることを強調しようとする姿勢が強く、他方、『日本』は普遍的なものは普遍的として、特殊なものは特殊なものとして、客観的に伝えようとしているといえる。この点についてはここでは方法として述べたが、両著書の特徴ともなっている。

さらに、両著書の方法における相違点や共通点について、いくつか触れておきたい。

第 1 に、『武士道』には、『日本』のように、図表や数値による〈統計〉、国際社会に対する〈貢献〉、〈共感〉、〈多面的説明〉といった方法の使用例がない。

第 2 に、〈単純化〉、〈質疑応答〉の方法は、少数ながら双方に用いられている。

第 3 に、〈批判〉、〈感情〉、〈予測〉、〈受容者側の用語や慣用表現〉といった、批判したり感情を伝えたりする方法については、『武士道』よりも『日本』のほうが、数多く使用されている。つまり、欧米に対して日本国民の生の感情や批判を伝えようとする姿勢が、『日本』にはより強くみられる。

第 4 に、『日本』は、1 つのテーマを多面的に描いている場合がみられる。例えば、農業・漁業については、地理に関する第 1 章と、政治に関する第 4 章と、食糧問題に関する第 6 章において言

及されている。さらに、林業については第1章と第4章において、労働問題については第4章と第6章において、それぞれ言及されている。これは、「同じ主題にも違った角度から接近しており、それぞれの章で、その問題に触れる局面が違っている」<sup>81</sup>という新渡戸の意図に基づいて、『日本』が執筆されたことによる。このように、同じテーマについて、多面的に幾度も訴えかける方法を用いているのは『日本』だけであり、『武士道』では用いられていない。

以上の第1から第4までを通して総括的にいえることは、『武士道』よりも、『日本』のほうがより多様な方法で日本像や日本人の国民性を伝えようとしているということである。

#### (4) 特徴

両著書における引用、つまり〈証言〉が何を典拠としているのかを分析することで、それぞれの特徴を明らかにしていきたい。

第1の特徴は、フィクション性とノンフィクション性である。

まず、『武士道』についてみると、新渡戸の主張の論拠となる引用部分が、「主として比較の例を、英米の文学及び習慣に取りたる」<sup>82</sup>場合が多い。特に、文学の一節、文学に描かれた逸話、聖書の一節、欧米人の慣習に関する事例が多く引用されている。すなわち、欧米の慣習を除くと、文学や逸話など、主としてフィクションからの引用が多い。

また、新渡戸が、「『武士道』は宗教体系ではない。それはおよそどんな種類の体系でもない。それには定まった体系はない。それについて論文を書いた人もきわめて少ない。」<sup>83</sup>と述べている通り、『武士道』は日本の武士道の確固とした体系を論証的に描いているわけではなく、彼自身の主張（思想）を主軸として、それを支えるために中国や日本の古典から取捨選択した思想を援用し説明している作品である。

これに対して、『日本』は、研究者の事実に基づいた研究内容、数値で表された統計、歴史的事実を多く引用している。このことから、『日本』は〈事実〉に基づいた〈真実〉を提示することで、日本と日本人のリアルな姿を伝えようとしているといえる。この点において、『日本』は、『武士道』よりもノンフィクション性が高いといえよう。しかし、『日本』にもフィクション性が皆無というわけではなく、類例の用い方において『武士道』と同様の場合がある。例えば、(4) 類似の項で挙げたアナクロニズムと地理的誤謬の例がそれである。

以上、『武士道』と『日本』の引用が何を典拠としているのかを分析した結果、両著書のフィクション性とノンフィクション性の高低が明らかになった。

新渡戸が、「空想と想像——故意であろうとなかろうと——が始めに否定しようとするのを、ついには事実がいっそう雄弁に語る」<sup>84</sup>と述べているように、対外発信をはじめとするPDにおいて〈事実〉に基づいた〈真実〉を伝えることの重要性を非常に意識していたことは紛れもない事実である。その理由の1つとしては、彼が当時の中国や朝鮮による虚偽の発信を非常に嫌悪していたことが挙げられる<sup>85</sup>。彼は、第1次世界大戦以降、IPRの国際会議をはじめ様々な国際会議に出席した際に、中国政府要人の虚偽発言を度々目の当たりにし、非常に不快感を覚えた<sup>86</sup>。満州事変以降は、新聞の捏造記事や捏造写真のばら撒きといった中国による宣伝活動は一層激化することになるが、そのような虚偽の発信について、新渡戸は、「永い目でみると」<sup>87</sup>、最終的には、「真理は碎けて土に帰しても、復活する」<sup>88</sup>ことになり、虚偽を流した国は最終的に国際社会で信用されなくなり、事実に基づく真実を伝えるPDが勝利すると考えていた。したがって、新渡戸が30代で『武

士道』を著してから、約20年後の50代で『日本』を著すにあたり、<事実>に基づく<真実>を伝えようとする姿勢を一層強めたと考えられる。

第2の特徴は、思想性である。この点については、第1の特徴と表裏になっている。

『武士道』は、新渡戸自身の主張すなわち思想を伝えるために、日本や中国の古典、西洋の文学、聖書の一節、識者の言辞を取捨選択して、自分の思想を支えるために用いているといえる。つまり、自分の思想ありきで、素材を収集し援用しているのである。東西の素材を用いて、新渡戸の思想を構築しているといえる。他方、『日本』は、出来る限り虚構を排除し、諸分野における統計や歴史的事実などの具体的なデータを分析し、そこから導き出される日本の実像を描き出している。すなわち、事実を積み上げることで、真実に迫ろうとする姿勢である。まず、事実の分析ありきなのである。その意味で、大掴みに捉えた場合、『武士道』よりは思想性が低く、ドキュメンタリー性が高いといえるかもしれない。

第3の特徴は、独創性である。これは、上述の特徴を別の視点から捉えたものである。日本の武士道には、それまで明確な形で体系化されたものは非常に少なかった。新渡戸が、日本人が精神面や慣習面で有している様々な思想の断片や行動を取捨選択し、彼自身の解釈を加えて、東西の言辞を援用して、欧米人が理解できる発信の方法で著した点に『武士道』の独創性があるといえる。

他方、『日本』は理念的・観念的な虚構をできる限り排除し、日本の地理・歴史・政治・思想などの諸相についての統計や歴史的事実に基づいて、そこから導きだされる<真実>を、欧米人が理解できるように提示することによって、日本の全体像を表現した点に独創性がある。

『武士道』も『日本』も、欧米人に対する発信という点に共通点があるが、発信の姿勢や方法が大きく異なっている。いずれにせよ、この両著書の目的・内容・方法などは、それまで日本人によってなされた対外発信にはなかったものであることは事実である。

第4の特徴は、方法で述べたことと重複するが、普遍性と特殊性に対する姿勢である。『武士道』は切腹などの日本の特殊なことを西洋にも通じる普遍性を有したものとして説明しようとする姿勢で描かれており、他方、『日本』は普遍的なことは普遍的なこととして、特殊なことは特殊なこととして説明しようとする姿勢で描かれている点である。

## (5) 受容度

『武士道』と『日本』の両著書がそれぞれどの程度受け止められたのか、その受容度について検討したい。その1つの判断基準として、出版当時に両著が欧米の新聞や雑誌に記事としてどの程度取り上げられたのか、その回数を調べることで両著書の受容度を比較する。

まず、『武士道』についてみると、初版が1900年1月、改訂版が1905年6月の出版である。その出版当時の1900年から1910年までの10年間に、新聞記事としてはイギリスの『マンチェスター・ガーディアン』(The Manchester Guardian)<sup>89</sup>に3回、アメリカの『ザ・ニューヨーク・タイムズ』(New York Times)に6回、合計9回掲載されている<sup>90</sup>。雑誌の論評や紹介記事としては、5誌に1回ずつ合計5回掲載されている<sup>91</sup>。とりわけ、『ザ・マンスリー・レビュー』(The Monthly review)は2度にわたって合計30頁余の長い論評を掲載している。1910年代に入って、新渡戸が日米交換教授として渡米した際にも、「『武士道』の著者が大学に講義に来る」<sup>92</sup>という見出しで新聞に紹介されている。さらに、1930年代には新渡戸の訃報記事において、イギリスの新聞『ザ・タイムズ』が『武士道』について触れている<sup>93</sup>。

次に、『日本』についてみると、出版が1932年9月である。そこからの10年間にイギリスの週間新聞『オブザーバー』(The Observer)に2回、それも出版直後の広告記事として掲載されているのみである<sup>94</sup>。

以上のように、両著書の出版当初の約10年間に新聞・雑誌に掲載された回数から判断すると、『日本』よりも『武士道』のほうが圧倒的な差でマスコミの注目を浴びたことは明らかである。

長期的にみても、現在でも『日本』は全集に収められているだけで、『武士道』のように単行本や文庫本として出版されることもなく、つまり一般的にほとんど注目されずに埋もれているといえる。

それでは、なぜ受容度にそのような差が生じたのであろうか。『日本』が『武士道』のように注目されなかった理由を以下に検討する。

第1の理由としては、出版の時期的な理由が挙げられる。これまで述べられてきたように、『日本』の出版の時期が、「満州事変の直後ということになったという、歴史の皮肉のため、先生の折角の御苦勞にもかかわらず水の泡となってしまった」<sup>95</sup>ことや、「この本が出て半月ほど後に起こされた満州事変と、その後のアジア侵略の軍閥の政治壟断とは、この書物で稲造が地道に切々と訴えた日本理解をすべて無に帰せしめ、ほとんど反響をよばなかった。」<sup>96</sup>ことがそれである。つまり、『日本』は出版のタイミングが悪かったために受容されなかったのである。これは、確かに1つの大きな理由であろう。付け加えると、『武士道』の出版は、日清・日露の戦勝直後であり、日本がアジア諸国の中から目覚しく抜きん出たことで、国際社会において注目された時期であり、日本が高揚していく上り坂の時期であった。それに対して、『日本』の出版は、日本の軍事行動が国際社会から懸念され、日本の政策が理解されにくくなりつつあった時期であり、その挙句に満州事変勃発の直後となった。

しかし、そのような時期的な理由だけでなく、『日本』が受容されなかった理由は他にも存在するのではないか。『日本』には『武士道』ほど多くの人を惹きつける要素が足りなかったのではないか、その要素とは何なのかを以下に検討する。

『日本』が注目されなかった第2の理由は、フィクション性の低さ、言い換えると思想性の希薄さである。『武士道』と『日本』の論拠となっているデータを分析した結果に基づいて、両著書のフィクション性とノンフィクション性の高低についてはすでに述べた。『日本』は、諸分野における統計や歴史的事実などのデータ、すなわち<事実>を積み上げることで、<真実>に迫ろうとしている。しかし、<事実>の分析によってより客観的に<真実>を伝えようとしたために、全体としてみた場合に思想性が希薄になったといえるのかもしれない。この点が読み手を引きつける力を減じたのではないかと考えられる。

また、『武士道』には、当時の欧米人からみると、武士の精神や切腹についての解釈など、異国趣味の文学的なロマンチズムが横溢していた。未知の国であった日本を知りたいという興味に答えてくれる要素があった。これに対して、『日本』は説明的・百科事典的であり、ロマンチックな文学性に溢れているとはいえない。すでに国際会議の常連ともなり、列国と肩を並べつつあった日本は、欧米人にとってエキゾチズムを唆るような国ではなくなっていたという見方も可能であろう。実際、『武士道』が当時も現在も読み続けられている事実から考えると、人はフィクションであってもより思想性の高いものに惹かれるのかもしれない。

第3の理由は、『日本』は描き出そうとしている対象が広く大きく、またその方法が複線的・多

面的であるために焦点が定まりにくくなっているからである。『日本』の当初の出版企画が、百科事典の叢書の一冊であったことも、そのような結果を生んだ理由の1つであったと考えられる。

第4の理由として考えられることは、執筆の目的の根源にある動機の深淺である。日本に対する理解の希求という意味においては、両著書ともに強い動機から著されたものである。『武士道』には、日本人の思想や行動を理解してもらいたいという純粋な動機があった。他方、『日本』には日本の全体像や国民性を理解してもらいたいという動機はあったものの、その根底に存在するのは日本の政策を認めてもらいたいという時事的な動機である。この根底にある動機の深淺が、他国人が著書を読んだ場合に、訴えかける力の強弱を生んだとはいえないか。

しかし、新渡戸が『日本』において、重層的で複雑な方法を駆使できるようになったこと、日本の全体像を語れるようになったことは、彼のPDの能力の1つの成熟を示していると捉えることも可能であろう。

以上において両著書について検討したことをまとめたものが、次の<表1>である。

<表1> 『武士道』と『日本』の比較

著書名	武士道：日本人の魂 (Bushido: The Soul of Japan)	日本：その問題と発展の諸局面 (Japan: Some Phases of her Problems and Development)
出版年月・出版社	1900年1月、リーズ・アンド・ビッドル社(米・フィラデルフィア)。1905年6月、G・P・パートナム・サンズ社(米・ニューヨーク、英・ロンドン)。	1931年9月、アーネスト・ベン社(英・ロンドン)。
時代背景	日本がまだ世界的にあまり知られていなかった時期。日本が日清・日露戦争に勝利し、列国の仲間入りを果たそうとしていた時期。改訂版は日露戦争末期の出版。	第1次世界大戦後に、日本が国際連盟に加盟し、日本人の新渡戸が事務次長を勤めるまでになった時期。日本が大陸進出を果たそうとしていた時期。執筆は、満州事変勃発の直前。出版は直後。
新渡戸の状況	30代。新渡戸は、世界的にはまだ無名。	50代。国際連盟事務次長を経た後。新渡戸の名前が、欧米の新聞に年に数回程度挙げられるほど有名。
対象(読者)	欧米人 <sup>97</sup>	欧米人 <sup>98</sup>
執筆の目的	日本人が欧米人に劣らぬ道徳観を有する国民であることを知ってもらおう。それによって、日本が一等国として相応しい国家であることについても理解を得る。	日本という国家や日本の国民性に対して、欧米からの信頼を獲得する。それによって、日本の苦境やそれを克服するための対中政策に対しても理解を得る。
内容(主張)	○日本の慣習や事象には、西洋に通じる普遍性があり、日本は好戦的で野蛮な国ではない。また、西洋に劣らない道徳観・倫理観、すなわち武士道を有した文明国であると主張。 ○日本は、外来の文化や制度をそのまま受容したのではなく、それらを日本が元々有していた能力によって追認したのだと主張 <sup>99</sup> 。欧米や中国の文化を鵜呑みに受容したのではなく、日本人の素地的・歴史的能力の優位性を強調。 ○焦点は、日本人が欧米人に劣らぬ道徳観を有していることに絞込まれている。	○日本の地理、気候、歴史、政治、教育、労働、食糧、人口、思想などの日本の諸相を説明し、それらから判断して、日本という国や日本人の国民性が、欧米に劣らぬものであり、信頼するに足るものであることを主張。 ○日本の苦境や時事的な問題を説明し、それらを克服するための日本の政策の正当性を主張。 ○仏教、神道、儒教のメタ統合によって生まれた武士道には、日本の独創性があると主張 <sup>100</sup> 。 ○焦点は、日本の全体像を理解してもらうために、日本の各分野(諸相)に広く当てられている。

著書名	武士道：日本人の魂 (Bushido: The Soul of Japan)	日本：その問題と発展の諸局面 (Japan: Some Phases of her Problems and Development)
方法	○日本の事象や慣習を説明する際に、西洋識者の言辞や文学の一説を引用し、それらを論拠として西洋との類似性を示すことによって、それらが日本だけの特殊なことではなく、欧米にも通じる普遍的なことであることを理解させようとする方法。 ○引用した言辞が、日本のことに類似していると強調している場合が多い。	○日本の地理、気候、歴史、政治、教育、労働、食糧、人口、思想などの諸相を、事実や統計を論拠として説明することによって、日本という国やその国民性に対して、欧米人からの信頼を得ることで、日本の時事的主張についても理解を得ようという方法。 ○引用した言辞が、日本のことに類似していると強調する場合もあれば、異なっていると主張している場合もある。
特徴 (1) フィクション性・ノンフィクション性	○新渡戸が「武士道、は宗教体系ではない。それはおよそどんな種類の体系でもない。それには定まった体系はない。それについて論文を書いた人もきわめて少ない。」 <sup>101</sup> と述べている通り、宗教体系でも論証された理論でもない、彼が思い描いた武士道を理解させようとしている点において、フィクション性が高い。 ○論拠となる引用部分（データ）の出所は、主に東西の文学、聖書、歴史的逸話。	○日本の地理・気候・歴史・政治・教育・労働・食糧・人口・思想などの諸相について、理念的・観念的な説明ではなく、数値で表された統計、歴史的事実・経緯を提示することによって、つまり「事実」に基づいて説明をすることによって、理解を得ようとしている。過去から現在までのリアルな日本の姿を描こうとしているという点において、ノンフィクション性が高い。 ○論拠となる引用部分（データ）の出所は、諸分野に関する統計、実際に起こった事件や事柄などの事実。
特徴 (2) 思想性	文学・聖書・歴史的逸話からその断片を切り取ってきて、それらを支えとしながら、新渡戸自身の思想を構築したもの。つまり、自分の思想ありきで、そのために文学的な素材を用いる姿勢。思想性が高い。	出来る限り虚構を排除し、諸分野における統計や歴史的事実などの具体的なデータを支えとして、日本の実像を描き出したもの。つまり、事実を積み上げることで、真実に迫ろうという姿勢。思想性が低い。ドキュメンタリー性が高い。
特徴 (3) 独創性	日本の武士道は、それまで明確な形で体系化されていなかった。新渡戸が、日本人が精神面や慣習面において有する様々な思想の断片や行動を取捨選択し、新渡戸自身の解釈を加えて、彼流の武士道を著した点に独創性がある。	理念的・観念的な虚構をできるだけ排除し、日本の地理・歴史・政治・思想などの諸相について、統計や歴史的事実に基づいた真実を提示することによって、日本の全体像を表現した点に独創性がある。
特徴 (4) 普遍性・特殊性	切腹などの日本の特殊なことを、西洋にも通じる普遍的なこととして説明。西洋に近づこうとする姿勢。	普遍的なことは普遍的なこととして、特殊なことは特殊なこととして説明。日本と西洋の共通点もあれば、異なる点もあると主張する姿勢。
受容度	出版後の数年間のうちにヨーロッパ各国語に翻訳・出版され、さらに中国語、ロシア語にも翻訳・出版され、世界的なベストセラーとなった。	出版当初から、低い受容度にとどまり、現在でも原文の英語と日本語訳が全集に納められているのみ。

## おわりに

本稿では、対外発信の観点から、新渡戸の英文著書『日本』を目的と方法を中心に考察した。以下に、それらを振り返ってまとめたい。

新渡戸は、当時の日本が抱えていた5つの苦境に対して、満州を活用することによって工業国として活路を見出すべきであると考えた。それを実現させるためには、日本の政策に対する国際社会の理解を得る必要があると捉えて、対外発信や人的交流などのPDを実施した。

新渡戸が『日本』においてとった方法（基本姿勢）は、日本の歴史や国情などの諸相から日本の全体像を説明し、日本の国民性に対する信頼感を獲得することによって、満州政策という局部的な主張についても理解を得ようとするものであった。

『日本』の内容については、統計や歴史的事実に基づく説明によって、日本の全体像を描き出すことを主眼としつつも、同時に局部的な時事問題についても要所要所で主張するという、全体と局部の二重構造を持つものであった。その具体的な発信方法としては、①事実、②統計、③証言、④類例、⑤比較、⑥貢献、⑦主張、⑧批判、⑨感情、⑩予測、⑪共感、⑫多面的説明、⑬単純化、⑭受容側の用語や表現、⑮質疑応答の15項目の方法が駆使されていた。

『日本』と『武士道』を比較した場合に、『武士道』は日本人が西洋に劣らぬ普遍性のある道德観を有していることを主張しており、主張の論拠としては文学や歴史的逸話から多く引用されている。他方、『日本』は地理・歴史・政治・思想などの諸相から日本を総括的に説明することで、日本が欧米に劣らぬ優秀な国家であり、信頼するに足る国民性であることを主張しており、統計や歴史的経緯などの〈事実〉を論拠として、そこから導き出される〈真実〉を伝えようとしている。

両著書の特徴については、①フィクション性・ノンフィクション性、②思想性・ドキュメンタリー性、③独創性、④普遍性・特殊性に対する姿勢といった側面が明らかになった。

両著書の受容度については、短期的にも長期的にも、『武士道』のほうが『日本』よりも圧倒的な差で注目を浴びた。その差が生じた理由としては、①出版の時期、②フィクション性・思想性の強弱、③焦点の当て方・直線的複線的伝え方の相違、④執筆動機の深淺の4点が挙げられる。

新渡戸が〈事実〉に基づく〈真実〉の発信に拘泥したことは、度々述べた通りである。『武士道』のフィクション性と他国による虚偽宣伝とは一線を画するべきであろう。しかしその一方で、虚偽宣伝が短期的であれ、人々に強い衝撃を与えて時局を動かした歴史的事実も、PDの観点から論じる場合に看過できない点である。虚偽もまた思想であるとして、それが戦略として用いられることをどのように考えるのか。そこに、日本人としての姿勢のあり方が問われるようにも思われる。『日本』が物語っている現代的課題の1つは、この点にあると考える。

ところで、新渡戸が第一高等学校校長をつとめていた時、学生の1人に、後に作家となる芥川龍之介（1892～1927）がいた。芥川は、新渡戸校長の倫理の講演を聴いたという。その芥川の短編小説に『手巾』がある。この作品は新渡戸をモデルにしたと芥川自身が述べており、実際この作品中のエピソードが新渡戸の著書『世渡りの道』や『帰雁の蘆』などから採取されていることから、芥川が新渡戸の実相を写そうとしたと考えてもよさそうである<sup>102</sup>。『手巾』は、これまで文学研究や風俗史をはじめ様々な観点から論じられてきた<sup>103</sup>。作品の梗概を述べる。

ある日、大学教授の長谷川の自宅に、教え子の母親が訪ねてきて、息子の死を告げる。その母親の顔には終始微笑みが浮かんでいるが、テーブルの下で彼女が手にするハンカチが激しく震えており、彼女が悲しみに耐えていることに、長谷川はふと気づく。その夜、長谷川は妻に語る際に、その母親を「日本の女の武士道だ」と称賛する。しかし、その後、彼は読みかけのJ・A・ストリンダベリ（J. A. Strindberg: 1849～1912）の作劇術の本に書かれていた一節「顔は微笑してゐながら、手は手巾を二つに裂くと云ふ、二重の演技であつた。それを我等は今、臭味と名づける。」<sup>104</sup>を目にして、困惑する。

この作品は、新渡戸に対する芥川の皮肉とも、あるいは裏返しの敬意とも、多様な解釈を許すと

されている。そこで、この作品をPDの観点から読み解くと、そこには新渡戸の2つの側面が描き出されている。1つめは、新渡戸が、ある事柄を表現するためにはそれに最適な方法が取られる必要があるということを強く意識していたことである。2つめは、自分が称賛したことに対して「臭み」と批判されたと感じたことから、新渡戸が物事の真実を伝えようとすることに鋭敏な感覚を有していたことである。PDを実施するにあたって、新渡戸が複数の〈事実〉の断片を分析し、それらから導きだされる〈真実〉を対外発信した、その側面を、芥川が意識的にか無意識的にか、別の角度から活写していたとはいえないか。

## 註

- 1 『新渡戸稲造全集』第6巻（帰雁の蘆）教文館、2001年、20頁。『新渡戸稲造全集』については、以下、「全集6（帰雁の蘆）20頁。」という形で表記する。全集17（日本国民）9頁。なお、本稿の「6. 『武士道』と『日本』の比較」においては、それぞれ以下の著書を用いた。全集18（日本）。新渡戸稲造・山本博文訳『現代語訳 武士道』筑摩書房、2010年（以下、山本訳『武士道』と表記）。
- 2 全集19（日本文化の講義）369頁。
- 3 同上。
- 4 全集5（講演）169頁。
- 5 同上書、167-169頁。
- 6 新渡戸稲造『世渡りの道』文藝春秋、2015年、213頁。
- 7 全集5（講演）169頁。
- 8 同上。
- 9 杵家弥七（杵家会6世家元）「記念長唄演奏「鶴亀」」『新渡戸稲造の世界』（第22号）財団法人新渡戸基金、2013年9月、279-280頁。
- 10 小林英夫『日本近現代史を読み直す』新人物往来社、2010年、62-63頁。
- 11 拙著『鶴見祐輔の広報外交：一「自由主義的」保守主義者の活動の特徴とその限界性』（早稲田大学出版、2011年。）、拙著『広報外交の先駆者 鶴見祐輔 1885-1973』（藤原書店、2011年。）を参照のこと。
- 12 他にも、(4) 国際社会における日本の地位を向上させるために、新渡戸自身が国際連盟事務次長に就任し、知的協力委員会を創設するなど国際的に貢献したこと、(5) 日本の立場を国際社会に訴えかけるために、自らIPR日本支部理事長として国際会議に出席し、海外の識者や政府要人と意見交換を行なったこと、(6) 日本社会において女子教育を一層根付かせるために、女子大学の設立に尽力したことなど、多数の事例が挙げられる。
- 13 1931年9月にロンドンのアーネスト・ベン社（Ernest Benn）から出版された。引き続いて同年に、装丁だけ異なるものが、ニューヨークのチャールズ・スクリブナーズ・サンズ社（Charles Scribner's Sons）から出版された。
- 14 『日本』について触れている一般書としては、以下の著書がある。しかし、いずれも学術的な分析がなされた著書ではない。草原克豪『新渡戸稲造はなぜ『武士道』を書いたのか：愛国心と国際心』PHP研究所、2017年。草原克豪『新渡戸稲造 1862-1933：我、太平洋の橋とならん』藤原書店、2012年。
- 15 全集19（日本文化の講義）11頁。1936年7月という出版年月日は、高木八尺の序文註記による。
- 16 新渡戸稲造『随想録』たちばな出版、2002年、336頁。
- 17 新渡戸稲造「拓殖と日本の進歩」『雄弁』大日本雄弁会、1913年8月、10頁。全集22（「世界問題調査会第十

- 回会議記録」寄稿文) 214-215 頁。
- 18 全集 22 (「世界問題調査会第十回会議記録」寄稿文) 215 頁。
- 19 新渡戸は、「日本が人口稀薄で未開発の土地を自国の近くに見出し、その土地を開発しようと願うと、全世界が起ち上がって、日本の動きを阻もうとする。」(全集 22 (「世界問題調査会第十回会議記録」寄稿文) 215 頁。)と述べている。
- 20 新渡戸は、「わが国の工業進歩を妨げるこの二つの障害にさらに加えて、もっと根本的な地理上の障害がある。それは日本の原料貧困、とくに鉄、金、石油その他、工業国の必要とする多くの物資の貧困のことである。」(全集 22 (英文大阪毎日寄稿文) 190 頁。)と述べている。
- 21 新渡戸は、「工業国になろうと熱望するに当たり、日本は高い関税障壁をよじのぼり」(全集 22 (英文大阪毎日寄稿文) 190 頁。),「国際連盟が多度の努力を払ってきたにもかかわらず、関税戦争は前よりいっそう荒れ狂っている。障壁は将来ますます高く築かれる見込みである。」(全集 22 (英文大阪毎日寄稿文) 189 頁。)と述べている。
- 22 全集 22 (英文大阪毎日寄稿文) 188-189 頁。
- 23 新渡戸稲造「満州は東西文化の出会点」『東洋時報』(102号) 1907年3月、6-7頁。
- 24 全集 19 (日本文化の講義) 277-285 頁。
- 25 新渡戸稲造「国自慢の戒」前掲『随想録』77 頁。
- 26 新渡戸は、「劣等国と見下されることを容認できない名誉心の感覚、———それこそがもっとも強い動機であった。」(山本訳『武士道』182 頁。)と述べている。他にも、以下参照のこと。新渡戸稲造「黄禍とスラヴ禍」前掲『随想録』68-73 頁。新渡戸稲造「東洋の米国主義」前掲『随想録』82-86 頁。
- 27 新渡戸稲造「米国旅行の印象記」『講演』(214号) 東京講演会、1933年4月、14 頁。
- 28 新渡戸は、「外交のビジネスは政府でやる。しかし大体の仕向け方は輿論がこれを指導して行く、といふことに、どこの国でもなりつゝあるものと思ふ。」(全集 6 (内観外望) 319 頁。)と述べている。
- 29 前掲、新渡戸「米国旅行の印象記」14-15 頁。
- 30 全集 4 (米国の対日態度に就て) 468-469 頁。
- 31 アメリカの元外交官・タフツ大学フレッチャー法律大学院長のエドムンド・ガリオン (Edmund Gullion : 1913~1988) が、1965 年に「政府が自国の政策を外国に伝達する際に重要なことは、相手国の国民と意見、関心、文化を交換して理解すること、それを (中略) 政策決定者に伝えてアドバイスすること、それが政策に反映されること、その結果立案された政策に関して相手国に説明し影響を与えること」(<http://uscpublicdiplomacy.org/> 2015 年 9 月 5 日付。)と述べた例が PD の定義の嚆矢であるとされる。本稿における PD の定義はこれによっている。さらに、PD の定義について説明を加えると、PD は、ある国の政府首脳や外交官が、他国の政府首脳や外交官と行う伝統的な「外交」とは異なる。基本的にはある国の政府が、他国の国民や民間組織を対象とする活動である。したがって、その国家の政府の立場から遊離した立場を取る人物による対外発信等の活動を PD とは呼ばない。近年、PD のアクターを民間組織にまで広げた解釈がなされている場合があるが、その場合でも、その国家の政府の立場から離れた活動を PD とは捉えがたい。PD は、日本語では「広報外交」や「広報文化外交」と翻訳され、広く用いられるようになったのは第 2 次世界大戦後、それも近年のことである。したがって、新渡戸が活躍した時代には PD という言葉はなく、本人も使用していない。PD は、第 2 次世界大戦前は、「宣伝」や「プロパガンダ」と呼ばれた。本稿においては、両者の相違について、PD はそのアクターが明示され、事実に基づいた情報を扱う活動であるのに対して、「宣伝」や「プロパガンダ」はアクターが明示されない匿名性の高い活動であり、新聞買収による情報操作や捏造電報の発信といった虚偽性の高い情報を扱う活動であると捉える。本稿においては、現代からみて PD に該当する新渡戸の活動を PD と呼ぶこととする。その理由は、①新渡戸自身が「宣伝」や「プロパガンダ」という当時の言葉を虚偽性が含まれる場合と含まれな

- い場合の両方で使用していることからその混乱を避けるため、②彼自身は虚偽性に非常に否定的であり、自身の活動においてその排除に努めたため、③彼の活動が一方向性・一面性の強い「宣伝」や「プロパガンダ」の発想を超えていることから、それらの言葉を用いるよりもPDを用いるほうがより適切であると考えられるからである。以下を参照のこと。全集22巻（英文大阪毎日寄稿文）178頁。前掲、拙著『鶴見祐輔の広報外交：一「自由主義的」保守主義者の活動の特徴とその限界性』137頁。新渡戸稲造『東西相触れて』たちばな出版、2002年、111頁。全集20（編集余録）316頁、347頁。
- 32 拙論「パブリック・ディプロマシーの観点からみた新渡戸稲造：国際連盟における活動を中心として」『渋沢研究』（第29号）渋沢研究会、2017年1月。
- 33 前掲、新渡戸「米国旅行の印象記」14頁。（ ）内は引用者による加筆。
- 34 同上。
- 35 全集4（米国の対日態度に就て）468頁。
- 36 同上。
- 37 同上。（ ）内は引用者による加筆。
- 38 新渡戸は、「獅子に石を投げると獅子は投げた人に喰ひつく。犬に石を投げると、ワンといつて石に喰ひつく。とかく外交問題にはさういふのがある。問題が湧き出たら、問題に喰ひつくよりも、問題を出した相手にかゝらなければならぬ。」（全集6（内観外望）323頁。）とも述べている。
- 39 新渡戸のこの方法とアーネスト・ベン社の出版意図との合致点に生まれた著書が、『日本』であった。
- 40 全集4（米国の対日態度に就て）467-468頁、14頁。
- 41 新渡戸稲造「国際連盟に於ける日本」『講演』（168号）東京講演会、1931年12月、27頁。
- 42 全集6（内観外望）323頁。
- 43 全集22（英文大阪毎日寄稿文）181頁。
- 44 同上。
- 45 拙論「パブリック・ディプロマシーの観点からみた新渡戸稲造：太平洋問題調査会（IPR）における活動を中心として」『太平洋問題調査会（IPR）とその群像』早稲田大学アジア太平洋研究センター、2016年、4頁。
- 46 全集22（英文大阪毎日寄稿文）193頁。
- 47 同上。
- 48 同上。
- 49 同上。
- 50 同上。
- 51 同上。
- 52 同上。
- 53 同上書、181頁。
- 54 全集19（日本文化の講義）274-275頁。
- 55 新渡戸は、「日本における近代産業の発達は、<sup>レ</sup>国家、<sup>が</sup>作り出したものであって、当初は<sup>レ</sup>西洋列強、の経済侵略と競争し、それを阻むべく奨励された。それは、経済諸力が妨げをうけず自由に活動した結果ではなかった。」（全集18（日本）、305頁。）と述べている。
- 56 全集18（日本）9-10頁。
- 57 前掲、新渡戸「国際連盟に於ける日本」28頁。
- 58 全集18（日本）198-199頁。
- 59 同上書、241-242頁。
- 60 同上書、269頁。

- 61 同上書、161 頁、372-373 頁。
- 62 同上書、292-293 頁。
- 63 同上書、148 頁。
- 64 同上書、234-235 頁。
- 65 同上書、21 頁。
- 66 同上書、285 頁。( ) 内は引用者による加筆。
- 67 同上書、161-162 頁。
- 68 同上書、51-53 頁。
- 69 同上書、125-126 頁。
- 70 同上書、158-159 頁。
- 71 同上書、351 頁。
- 72 同上書、135-136 頁。
- 73 同上書、169 頁。原文は「でさなかつた」。( ) 内は引用者による加筆。
- 74 同上書、183-183 頁。
- 75 同上書、116 頁。
- 76 同上書、10 頁。
- 77 同上書、386-387 頁。( ) 内は引用者による加筆。
- 78 前掲、新渡戸『随想録』135 頁。
- 79 全集 4 (米国の対日態度に就て) 468 頁。
- 80 全集 18 (日本) 10 頁。
- 81 同上書、10-11 頁。
- 82 前掲、新渡戸『随想録』135 頁。
- 83 全集 18 (日本) 380-381 頁。
- 84 全集 22 (英文大阪毎日寄稿文) 181-182 頁。
- 85 新渡戸の中国観・朝鮮観については、前掲、拙論「パブリック・ディプロマシーの観点からみた新渡戸稲造：太平洋問題調査会 (IPR) における活動を中心として」を参照のこと。
- 86 全集 22 (英文大阪毎日寄稿文) 179-181 頁。
- 87 同上書、181-182 頁。
- 88 同上。
- 89 1959 年以降は、『ガーディアン』(The Guardian) に名称が変更された。
- 90 『マンチェスター・ガーディアン』(The Manchester Gurdian) 1904 年 9 月 20 日付、1905 年 9 月 28 日付、1909 年 5 月 10 日付。『ニューヨーク・タイムズ』(New York Times) 1905 年 1 月 24 日付、同年 4 月 1 日付、同年 5 月 20 日付、同年 9 月 2 日付、1907 年 10 月 19 日付、1908 年 12 月 4 日付。
- 91 『アカデミー・アンド・リテラチャー』(The Academy and literature) 1904 年 9 月 10 日、1910 年 12 月 24 日、『マンスリー・レビュー』(The Monthly review) 1904 年 3 月 14 日、1904 年 7 月 16 日、『ジ・アテナエウム』(The Athenaeum) 1904 年 9 月 3 日、『レビュー・オブ・レビューズ』(The Review of reviews) 1905 年 9 月、『サタデー・レビュー・オブ・ポリティックス・リテラチャー・サイエンス・アンド・アート』(Saturday review of politics, literature, science, and art) 1905 年 7 月 29 日。
- 92 『ニューヨーク・タイムズ』1911 年 9 月 1 日付。
- 93 『タイムズ』(The Times) 1933 年 10 月 17 日付。
- 94 『オブザーバー』(The Observer) 1931 年 11 月 1 日付、同年 11 月 15 日付。

- 95 全集14（前田陽一「解説」）639-640頁。
- 96 佐藤全弘・藤井茂『新渡戸稲造事典』教文館、2013年、120頁。
- 97 新渡戸は、「予のこの卑著あるは、欧州人のためにいささか我が国人を説明せんとするがためにして」（前掲、新渡戸『随想録』136頁。）と述べている。
- 98 新渡戸は、『日本』の序で、「本書執筆に当たって、私は心の眼の前に、たえず賢明なイギリスの読者を二三人思い浮かべていた。」（全集（日本）10頁。）と述べている。
- 99 新渡戸は、「孔子が述べた五つの道徳的な関係、すなわち君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友の関係は、彼の著作が中国からもたらされるはるか以前から、日本人が本能的に知っていたことを追認したものにすぎない」（前掲、山本訳『武士道』30-31頁。）と述べている。
- 100 新渡戸は、「それ（武士道）を分析するならば、その成分を大陸から日本へ到来した、さまざまな信仰体系や思想学に戻着させることができる。その独創性は、その要素ではなくて、その結合にある。より良い意味で——すなわちカーライルが使った意味で——武士道は独創的なのである。」（全集18（日本）372頁。）と述べている。
- 101 全集18（日本）380-381頁。
- 102 相川直之「芥川の「手巾」論：新渡戸稲造の影響」広島大学近代文学研究会『近代文学試論』40号、2002年12月。
- 103 以下をはじめとして、多数の研究がある。三島由紀夫「解説」芥川龍之介『南京の基督 他七編』角川書店、1956年。熊倉功夫「礼儀作法の話」井上俊編『風俗の社会学』世界思想社、1987年。前掲、相川「芥川の「手巾」論：新渡戸稲造の影響」。竹内里欧「「手巾」と「武士道」ブーム：〈擬-普遍〉主義的主体化のメカニズム」京都大学大学院文学研究科社会学研究室『京都社会学年報』17巻、2009年12月。
- 104 『現代日本文学大系43：芥川龍之介集』筑摩書房、1968年、32頁。

## Public Diplomacy by Inazo Nitobe

: Analysis of his English book “Japan : Some Phases of her Problems and Development”

Kazuma UESHINA

Public Diplomacy is an activity to lead the public opinion of other countries to a favorable position on its own country. It allows a country to accomplish its policy smoothly in international community using lectures, international cultural exchanges, international broadcasting, goodwill visits, the formal official statements and large international events, etc.

Inazo Nitobe (1862-1933) is known as a liberalist and an internationalist involved in various activities in fields such as education, colonial policy, religion, agricultural administration, and international relations in the period between World War I and World War II.

He was involved in Public Diplomacy which affected the European and American public opinion of Japan. This was done through lectures, writing articles to newspapers and magazines, publication of some books written in English, personal exchanges with key political figures from other countries and educational cooperation with people in the arts and sciences community abroad. In many of these instances, he stood in for the Japanese Government and brought a higher level of international visibility to the government.

As an example of English book written by Nitobe, “Bushido : The Soul of Japan” is world famous. This paper analyzes his English book “Japan : Some Phases of her Problems and Development” published about 30 years after “Bushido” and analyzes it from the perspective of Public Diplomacy. “Japan,” which was published shortly after the Manchurian Incident, contradicted the content of this book on the theme of Japan’s desire for peace and the military action of Japan over Manchuria. For that reason, “Japan” did not become a global bestseller like “Bushido”. Due to such acceptance, research on “Japan” has not been done to its just extent.

### [Key words]

Public Diplomacy, Public relations activities for overseas, Inazo Nitobe, “Bushido”, “Japan”, Interwar period